

伊豆署職員実行によるニホンジカ捕獲のこれまでとこれから

関東森林管理局 伊豆森林管理署 主事 藤垣 遼大

1 課題を取り上げた背景

ニホンジカ (*Cervus nippon*、以下、シカ) の爆発的な個体数の増加や分布域の拡大に伴って、農林業被害は全国的に深刻であり、効率的な個体数調整が喫緊の課題となっています。静岡県による第二種特定鳥獣管理計画（ニホンジカ）は、現在第5期であり、引き続きシカ対策を講じています。伊豆森林管理署（以下、伊豆署）は、平成27年度から職員実行によるシカ捕獲を実施しており、昨年度10年目を迎えました（写真－1）。静岡県による生息頭数の推定によると、伊豆地域では、基準年とした平成27年度の43,319頭（最大値）から令和2年には、36,087頭であり減少傾向が見られていると報告しています（静岡県 2023）。今後生息頭数の減少に伴い、捕獲が困難になることが想定される中、伊豆署職員実行によるシカ捕獲数もここ数年伸び悩んでいます。しかし、シカの高い繁殖能力から捕獲圧を緩めると、再び生息頭数が増加傾向になることが予想されており、捕獲圧を維持する必要があります。本発表では、伊豆署職員実行による10年間のシカ捕獲についてまとめ考察することで、今後の展望を議論します。



写真－1
署職員が仕掛けたわなにかかったオスシカ

2 取組の経過

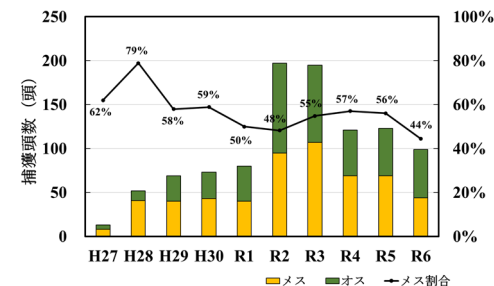
足くくりわなとアルファルファヘイキューブ等の誘引餌によって捕獲された、平成27年から令和7年3月までの10年間の個体データを、捕獲個体記録票を元に集計しました。集計データから、シカの捕獲実態を把握しました。捕獲実態の把握には、捕獲数、捕獲効率、メスジカの捕獲割合、時期別捕獲実施回数等を用いました。なお捕獲効率は次式により算出しました。

$$\text{捕獲効率} = \text{捕獲数} / (\text{捕獲期間平均稼働わな台数} \times \text{稼働日数})$$

3 実行結果

10年間のシカ捕獲数は、1,022頭となりました（図－1）。捕獲効率の平均値は0.0458となり、桑野ら（2019）が福岡県で実施した試験結果の最大値0.0417を上回りました。

捕獲効率の最大値は、平成28年度の0.0621、最小値は、令和6年度の0.0344でした。一方捕獲に占めるメスの割合は、平成27、28年を除くと6割を超えることなく、5割程度のまま伸びていません。時期別の捕獲実施回数は、10～12月が最も多く59回、4～6月が最も少なく9回でした。



図－1 伊豆署におけるシカ捕獲数の推移。
棒グラフは捕獲数（左軸）を示し、折れ線グラフは捕獲数に占めるメスの割合（右軸）を示す。

4 考察

伊豆署のこれまでのシカ捕獲を数値化することで、様々なことが見えてきました。シカ捕獲に投入できる予算や労力は限られています。今後、より効率的な捕獲を目指すため、捕獲の空白期間である4～6月に捕獲を実施することや伊豆署の高い捕獲効率の技術を維持していく必要があります。また、効率的な個体数の調整にはメスジカの捕獲が重要であるため、メスジカを選択的に捕獲する方法を模索していく必要があります。さらには、県や市、猟友会との情報共有や連携も重要になってくると考えます。

－参考文献－

静岡県自然保護課（2023）第二種特定鳥獣管理計画（ニホンジカ）（第5期）

桑野泰光・檜崎康二・池田浩二（2019）足くくりわなによる効率的なニホンジカ捕獲手法の検討。福岡県農林業総合試験所研究報告 5号：p.62-67